優秀賞

おれの相方

白浜小学校五年　早川幸汰

「おれ相方やめた。」
ぼくは弟に言ってやった。
「おれもやめた。こうちゃんなんかきらい。」
と、弟が言った。ついさっきまですごく仲良く遊んでいたのに、いつもこういう風になってしまう。
　ぼくには、十四才の兄と、六才になる弟がいる。ぼくは十一才、三人兄弟だ。けっこう年がはなれているから、けんかにならないと思われるかもしれない。だけど、ぼくの弟はすごいのだ。言いだしたら、人の言うことに耳をかさない。気に入らないことがあると、大声で泣きさけぶ。さらに、この声がたまらなくでかい。買い物に出かけたときにぐずられたら、たまったもんじゃない。お母さんに「買い物するから面どうを見ていて。」と言われたら、最悪だ。お母さんが無理なのに、ぼくがこの暴れんぼうかいじゅうを、どうにかできるわけがない。そして、しまいにはぼくまで、いっしょにしかられるはめになる。もう全然なっ得がいかない。とにかく、ものすごくわがままなのだ。ぼくが、
「海汰はわがままずぎる。」
ともんくを言うと、
「幸汰もそんなもんだったよ。」
「買い物中、きいきいさけんでいたよ。」
と、お母さんが言う。もしそうだったとしても、海汰には絶対に負けるだろうと思う。
　ある日、海汰がとびひになり、少し熱が出た。さすがにいつもの元気がなくて、ふうふう言っていた。とびひなんて、薬をぬれば治るだろうし、熱だって、薬を飲めば治るだろうと思って、ぼくはあんまり心配していなかった。ところが、一日たっても熱は下がらなかった。とびひは少しずつはれて、うみが出始めてきた。ぐったりとしてねていたと思ったら、いきなり
「アイパット返して。」
と、さわぎ出した。お母さんが
「アイパットなんて知らないよ。」
と言っても、
「あそこにあるじゃん。」
「アイパット返して。」
と、同じことをくり返しさけんでいた。海汰があそこと言うところには、アイパットなんて置いていない。始めは、ねぼけていると思って、ぼくは笑っていた。何をおかしなことを言っているんだろうと思った。海汰がまたうとうとしだして、ねたかな、と思ったら、今度は保育園の友達の名前を言いながら、わけの分からないことを言いだした。ぼくは、なんだか背中がぞわぞわしてきた。さっきまでは笑っていたけれど、少しずつ心配になってきて、思わずお母さんに、
「海汰だいじょうぶ。」
と聞いた。
「熱があるから、うなされているんだよ。」
と、お母さんが言った。少しうなされているだけだと思っても、海汰が起きるたびにどきどきした。こわいと思った。このまま熱が下がらなかったらどうなるんだろう、と不安になった。ふだんは、生意気なことばかり言うし、うるさいし、海汰のせいでおこられることもあるし、じゃまだなと思ったこともある。でも、いつもぼくのくだらないギャグで、いつまでもゲラゲラ笑ってくれる。ぼくの遊びにうれしそうに付き合ってくれる。まだ上手くできないくせに、ぼくのまねをして、ソフトの練習をする。そんな海汰が、いつまでもねこんでいたらつまらない。早く元気になっていっしょに遊びたい。がんばれ、海汰。
「おいこうちゃん早く来い。」
げんかんでえらそうにぼくをよんでいるやつがいる。あれから、少しずつ元気になった、ぼくの弟だ。元気になってとてもうれしいし、本当に良かったと思うけれど、「早く来い。」は、ないだろうと思う。こんなことを思っては、いけないけれど、熱があったときの方が弱っちくてかわいかったような気がする。ぼくが家の周りでソフトの練習をすると言ったらすぐついてくる。バッティングの練習だから海汰が来てもあぶないし、じゃまなだけだ。それにうるさいから、自分の練習は後にして、ボールを投げてやって、打たせてやろうかな。
「おいこうちゃん、なにやっとるだ。」
またさけんでいる。お母さんが
「うるさいから早くやってやりん。」
と言った。そのうちお父さんまで
「海汰がよんどるだろう。早くしろ。」
とぼくをせかす。ぼくはため息をつきながら、
「海汰ソフトやる。」
と聞いてやった。
「やる。」
と海汰の元気な声がきこえた。ぼくはしょうがないから、また相方になってやるかと思い家へ向かった。
　ぼくの弟は、いつも一生大切な「おれの相方」だ。